

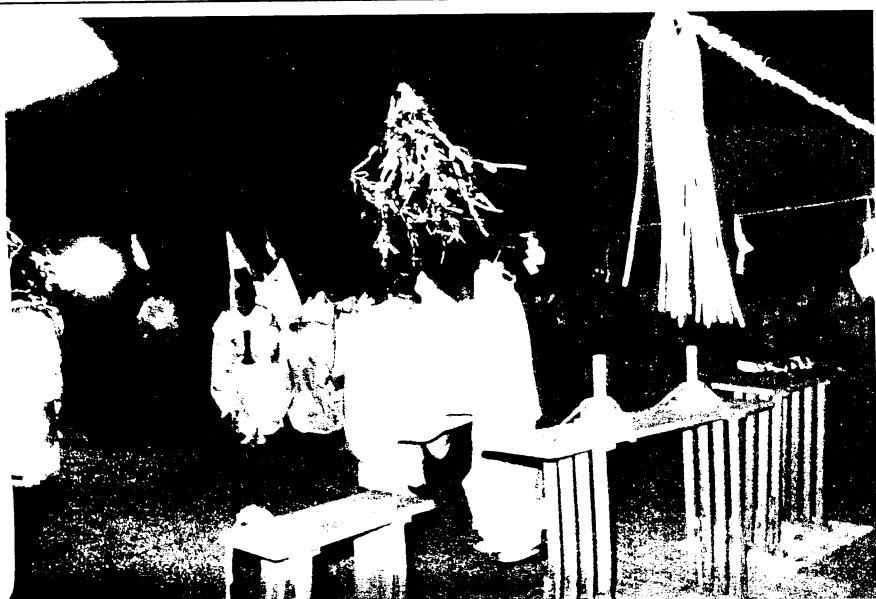


### 第 3 6 7 号

昭和44年6月1日創刊  
 平成16年11月8日発行  
 発行所及責任者  
 川崎市多摩区東生田4-13-17  
 電話番号 044-976-0708  
 郵便番号 214-0031  
 宗教学者 出雲心友会 彦  
 編集兼発行人 佐藤行彦  
 毎月8日(日)発行  
 1部150円(送料共)  
 年間購読料1,800円

## 出雲の神迎

出雲大社の神在祭は、今一週間(陰曆)がその期間も陰曆によって行われ、十月十一日から十七日までの十一月二十一日から一週間



稲佐の浜での神迎祭

ただし、その前日の夜に神迎祭があり、またそれに先立つ潔斎もあるもので、神社としてはかなり長期にわたる緊張の連続です。

神々の会議の場所は本社でなく、本殿から一キロ余り西の、稲佐の浜にほど近い字飯の宮之、撰社上ノ宮となっております。

しかし、初めからここへ参集されるのではなく、まずは本殿の両側にある十九社へお入りになり、ここから昼間だけ上ノ宮へ行つて会議をされ、夜には十九社へ帰ってお休みになると伝えられています。

十九社は、本社の東西にそれぞれ十九社ずつあるのとなり、合計三十八社ということになりますが、このうち東十九社へは出雲大社より東の神々が泊まれ、西十九社へは西の神々が泊まられるとされています。また、十一月を『神無月』

と呼ぶのは、日本全国の神々が出雲へ行かれ、その土地を留守にする為です。逆に、出雲地方は、神々がお集まりになられるので、『神在(有)月』と呼びます。

この『神在』という言葉は、中世に古文書焼失の事情もあり古くは遡上できませんが、正平八年(一二三五年)の千家国造家文書に『くそ(国造)殿へけんけう(檢校)仕候御やくんげう之事』に「毎年十月神在に三貫文之事」とあり、しかも末文では、「せんそ(先祖)代々仕きたる」神事とされて、この十月神在が遡上する古伝のものであることが想像出来ます。

しかし、出雲(大社)への神集いについては、今のところ『奥義抄』、『和歌童豪抄』によって平安時代には確認出来ません。後書には「十月は万ノ神たち出雲ノ国へおはし坐すに依て神無月と云」とあり、かなり古くからこういう信仰が人々の間にあったことが窺えます。毎年、出雲心友教会でも

稲佐の浜での荘厳な神事、神迎祭に参列させて頂いておりましたが、今年は十一月二十一日(日)の夜が、その日に当ります。

稲佐の浜でかがり火をたき、大きな神の神籬を立て、祭壇を設けます。そして、三方には、八百萬の神々の水先案内人として「龍蛇神」を乗せて、海からお集まりになられる神々を出雲大社の管長先生を始めとする神職の方々が迎え、大社町をお練りして、出雲大社の神楽殿にお連れするので

す。地元の人々は、神迎祭の事を御忌祭と呼び、昔は歌舞音曲をとどめ、物音をたてず、ひっそりと謹慎斎戒の生活をしたそうです。出雲は、神々の国と言われる様に、人智でははかり知れない不思議な現象が、古くから伝わっています。先程も申しましたが、出雲大社にお迎えした神々は、境内の東西にある十九社という社殿にお泊りになります。(普段は空の社です)ここを旅社として、八百萬の神々は翌日から一週間、大國主大神を中心に

来年の国政、人間の寿命、人と人との出会いと縁、運勢などを相談されるので、す。

十七日(陰曆)の夕刻になると、いよいよ神々のお立ちというところで、神等去出祭と称する神送りの儀を行ないます。

本殿および八足門の扉を開き、階下の中央に案を置き、そこへ三升餅を七十六個の小餅にして供えます。

どうして七十六個かという三十八社(東西の十九社)にそれぞれ二つずつという計算で、お土産として供えるのです。

こうして準備ができると祝詞をあげ、禰宣が「お立ち、お立ち」と三度連呼して、素手で楼門の扉を叩きます。これで神々はお帰りになるのです。

さて、今年も十一月二十一日(土)から二十三日(火)まで私共出雲心友教会でも神迎祭参列の為に、出雲へお参り致します。

今年の神迎祭は、寒い事が予想されますので、十分な準備と心構えで臨みましょう。